ビジネス展開／インタビュー

NTTグループ各社と連携して豊かな未来を実現する安心・安全・便利な技術の研究・開発に挑戦していきます

NTT グループの大規模基幹系システムの開発を通じて、長年にわたり、わが国の情報通信インフラを支えてきた NTT コムウェア。その中で、品質生産性技術本部は、NTT グループの競争力の向上と連携強化に向け、最先端技術の活用によりグループを支える基盤技術、開発技術、サービス技術の研究・開発に取り組んでいる。ここでは、NTT コムウェアの研究・開発における注力分野や今後の活動について、品質生産性技術本部長の高間徹取締役に伺った。

NTTコムウェア株式会社
取締役　品質生産性技術本部長
ビジネスクリエーション部長
高間 徹氏

4つの注力分野を中心に研究・開発活動を展開

――NTT コムウェアの研究・開発活動で、現在注力している分野についてお聞かせください。

高間　品質生産性技術本部にて NTT コムウェアにおける研究・開発活動として、2015 年度は 4 つの分野に注力した活動を進めてきました。その 4 つの分野とは、（1）ネットワークサービス基盤技術、（2）BigData 処理基盤技術、（3）モバイル／上位レイヤ基盤技術、（4）最近は IoT（Internet of Things）と呼ぶことが多いのですが、M2M（Machine to Machine）基盤技術です。

――各注力分野での主な活動をご紹介いただけますか。

高間　ネットワークサービス基盤技術では、昨今のトレンドである SDN（Software-Defined Network）などの技術で実現するネットワークサービスのオペレーションに関する研究・開発に取り組んできました。また、BigData 処理基盤技術では、BigData リアルタイム分析技術をエネルギーマネジメントへの適用を検討する一方、長年 NTT グループの通信基盤の開発・運用に携わってきた当社の経験を活かし、通信インフラ回りのログ分析に使うことも検討してきました。モバイル／上位レイヤ基盤技術では、HTML5 を利用した多言語コンテンツ共有技術を活用した「多言語字幕・解説システム」を実現しています。これは、複数の利用者のタブレットに同一コンテンツを配信する一方で、英語やドイツ語、スペイン語などの利用者の母国語に応じた個別のコンテンツを表示させるものです。本システムは、2015 年の 9 月に矢来能楽堂（東京都新宿区）でトライアルを実施し、非常に好評でした。このシステムの特長は、専用アプリケーションが不要なため、デバイスや OS の種類に限定されずに幅広い環境で利用可能なことです。実際、トライアルの環境はトランクひとつで持ち運びができるほどコンパクトなので、京都に運んで能の関係者に使ってもらう、ということも行いました。最後の M2M 基盤技術については、老朽化が問題視される橋梁・トンネル・道路照明などの社会インフラを守るための遠隔監視の実証実験を行ってきました。

新技術をお客様の利便性を追求したサービスに

――NTT グループ各社の取り組みでも同種のものが見られますね

高間　これらの分野が現在のトレンドであることは確かです。10 年以上も前から既にユビキタスネットワークという形でこれらの分野のコンセプトはありました。ただ、当時と

比較し、現在ではデバイスの値段が大幅に下がる一方で、その性能は格段に進歩しており、実際に実現できる技術の内容は大きく違ってきています。私はそのような技術をどう役立てるかがIT業界全体の重要なテーマであるとともに、NTTコムウェアが貢献できるところが大きいと考えています。

ただ、優れた技術だからといって、そのままでお客様に受け入れられるとは限りません。矢来能楽堂でのトライアルでは、画面の明るさを抑止したタブレットを貸し出しました。能の舞台はそれほど暗くならないのですが、それでもタブレットの明るい画面を迷惑に感じるお客様もいます。そのような「痒いところに手が届く」配慮をしていくことが、ビジネス化する上での重要なポイントになると思っています。

ＮＴＴグループの連携を強化しながら競争力を高めていく

――2016年度の取り組みについてお聞かせください。

高間　2つの大きなポイントを踏まえて活動を進めていく考えです。その2つとは、「NTTグループの競争力を高めること」と、「NTTグループ内での連携を深めること」です。

1つ目の「NTTグループの競争力を高めること」のためには、NTTコムウェアでは世の中の動向を見据えた研究開発が必要と考えています。そのため、世の中の動向を分析し、その中での課題を解決するための手段としてどのような技術が必要なのかを明確にしながら、研究・開発活動を進めています。この活動の方向性を明確にするために、「技術ロードマップ」を作成しており、技術トレンドを的確に反映していき、ロードマップに沿った技術を磨いています。その技術を、実際に課題を抱えているお客様をアカウントしているNTTグループ各社に課題解決の手段として提供することを通して、グループ全体の競争力を高めることに貢献できる、と考えています。

2つ目の「NTTグループ内での連携を深めること」については、グループ各社と技術共有・統合を図りながら、共通開発技術の整備・創出に取り組んでいきます。既に2012年度からは、NTTソフトウェアイノベーションセンタとNTTデータと共同で、システム開発技術に関する開発スピードの高速化、低コスト化に向けた取り組みを開始しています。2013年度には、NTTソフトウェアイノベーションセンタの主導のもと、NTTデータとNTTコムウェアが協力して整備したWeb系業務アプリケーションフレームワーク技術「Macchinetta（マキネッタ）」*1を確立し、自動化のベースとなる開発プロセスも整備して全社展開を進めています。

――NTTコムウェアは長年通信基盤を開発・運用してきた豊富な経験がありますね。

高間　そのDNAは現在でもNTTコムウェアの中に生きています。当社はそもそも交換機のソフトウェアを開発するNTTの一部門としてスタートしていますので、ソフトウェアの書ける人間も多く社内おりますし、システム開発で培った管理ノウハウも蓄積されています。また、検証のために社内に持っている設備も多いなど、恵まれた環境があります。自分たちが設計し、コーディングしたものを商用化して世の中に出した経験がある、というのはたいへん貴重なDNAです。現在、開発手法についてはアジャイルなど各種のものがありますが、開発の重要なポイントは、お客様の求めるものを的確に把握し、その実現に最適なシステムを開発し、運用を行うという商用化の経験の有無です。NTTコムウェアには、そのような歴史に裏づけられた磐石な基盤がある、と思っています。

――最後に、今後の活動への抱負をお聞かせください。

高間　NTTグループの橋渡し役として、NTTコムウェアだからこそ気付くことのできる技術、グループ各社の強みを引き出すことができる技術の研究・開発に引き続き取り組んでいきます。2016年度にはその成果としてNTTグループの競争力を高め、豊かな未来を実現していく新たなサービスを世の中に出していく予定です。ぜひご期待ください。

――本日は有難うございました。

＊1　『Macchinetta』は、NTTソフトウェアイノベーションセンタが開発し、名称及びロゴは、日本電信電話株式会社の登録商標です。